

本発表は、バーナード・ウィリアムズと R. M. ヘアのあいだで交わされた論争の検討を通じて、倫理学理論の問題を明らかにすることを目標とする。

ヘアは普遍的指令主義というメタ倫理的立場と功利性にかんする選好説、そして二層理論というアイデアにもとづいて、選好・二層功利主義と呼ばれる理論を導出した(Hare 1981)。この理論は、我々の道徳言語が指令性・普遍化可能性・優越性をもつことにより発せられる論理的要請と、我々が選好にもとづいて合理的判断を下すという経験的事実、そして我々の道徳的思考には二つのレベルが存在するという心理学的見解にもとづいて、道徳的思考と実践の内実を解明するという目的をもつ。ヘアによれば、この功利主義はいかなる個々の道徳的直観にも基づくことなしに導出される点で合理主義的な理論であり、さらに従来の功利主義に向けられていたいくつかの代表的な批判に応答可能である点で洗練された理論である。この合理主義的な立場は、価値間の衝突の問題を解決できないウィリアムズのような直観主義者や、道徳を自然誌的事実に基礎づけるというある種危険な回り道をする P・フットのような自然主義者の弱点を回避している点でより見込みがあるとヘアは主張する。これに対してウィリアムズは、従来の一般的な功利主義批判を超えた論点を提供しうる苛烈な批判を投じた(Williams 1985)。しかし、ウィリアムズのヘア批判はさまざまな論点が点描されつつ、それぞれが交錯する形で展開されており、いまだ十分な網羅的整理が行われていない(ibid; Seanor & Fotion 1988)。また、ウィリアムズの批判に対してヘアは一応の応答を行なっているが、それらの記述は簡素なものが多く、ウィリアムズの問いかけを真正面から受け止めていないきらいがあり、十分な応答であるとは言いがたい。これらの解釈上の難点により、師弟関係にあった二人のあいだで交わされた論争自体の知名度に反して、その内実と行方はいまだ明瞭になっていない。

そこで本発表では、彼らの主張を再構成し、争点を明確にすることで、より包括的に整理された論争の構図を提供することに努める。そして、これらの作業により、ウィリアムズが投じたヘアの理論の根本的な問題とは何だったのかを理解を試みる。ただし、本発表の目的は単にヘアが自身の立場の擁護に失敗したことを示すことで彼らの論争に決着をつけることではない。そうではなく、ヘアの功利主義理論に特有の問題を超えた倫理学理論そのものの根本的な問題にかんしてウィリアムズが与えた重要な示唆を理解することが真の狙いである。倫理学理論は倫理的思考や実践を合理主義的な仕方でも単純化、還元化することによって、我々のリアルな倫理的生についての誤解を生じさせてしまう(Robertson 2017)。そして、功利主義理論でもって私たちの道徳や倫理を理解せんとするヘアの試みはその最たるものである。それゆえ発表者は、運や恥、後悔、確信、必然性、自信といった多様な現象や概念に溢れている我々の倫理の領域へと侵犯する倫理学理論の越権を明らかにする試金石として、ヘアの理論を検討したい。そのために本発表では、二人の論争を道徳言語分析・選好説・二層理論というヘアの倫理学理論が含む主要な三つの観点にしばって検討する。

第一に、ヘアによれば、道徳は言語的直観から導き出される

普遍性、指令性、そしてとりわけ優越性という性質によって最も正確に理解される。しかし、まず我々が行う評価がすべて普遍化可能な指令という形で表現可能でなければならないとする解釈は、その評価対象についてのあまりに狭隘な見方である。また、我々が行う評価や判断を道徳的たるものにする際に決定的な役割を果たすとされる優越性も、本発表で行われる考察を通じて、道徳判断を他の判断から区別する上で結局は説明力をもたないということが明らかにされるだろう。

第二に、ヘアは道徳の問題が選好という我々の生における基本的事実にもとづいて解決可能だと論じている。しかし、たとえ選好が倫理的に重要な考慮だとしても、その道具立てだけでもって問題を解決できるとするヘアの理論は誤っている。道徳や倫理の問題は、「こうすべきだ」「こうするしかない」「これに賭ける」「これを確信している」といった、行為や信念を表す多様な様相や概念で溢れており、そうした多様な捉え方の存在こそ、我々の人生の意味をなしている当のものである。しかし、これらの捉え方を、選好にもとづく単純な捉え方に落とし込まなければ価値判断の衝突といった道徳的問題を合理的に解決することは不可能であるとするヘアの理論は、合理性についての合理主義的な捉え方(rationalistic conception of rationality)に囚われており、そのような捉え方は適切な世界の解釈を提供しない。

第三に、ヘアによれば、二層理論は「功利主義は我々の直観に反する結論を導いてしまう」とする従来の批判を回避することを可能にし、かつ我々の常識的な道徳心理学にも合致する点で洗練された功利主義理論である。しかし、我々の道徳心理学的現象をつぶさに観察すれば、こうした思考の二分化は無理のあるものだということが明らかとなる。ヘアによれば、二層理論において直観的思考の価値は批判的思考によって正当化され、かつその価値は直観的レベルにあるときには自体的な価値であるとされるために批判的レベルで行われた正当化を意図的に忘却せねばならない。しかし、ウィリアムズによれば、そうした思考はあるがままの倫理的思考を歪ませる心理的に不可能なものであり、我々の倫理的実践の解釈としても意味をなさない。

以上で簡潔に示された予備的考察は本発表でより具体的に展開されるが、それらによって明かされるのは、ヘアの理論が還元や合理性、不偏性に依拠することによって我々のリアルな生を誤解しているということである。本発表では最終的に、こうした誤解を生むこれらの特徴が、倫理学理論一般に当てはまるということを示すことで、我々の倫理的思考を明晰化するという野心をもつ倫理学理論が、皮肉にも当の倫理というものについて適切な解釈を提供できないと論じる。

Hare, R. M. (1981) *Moral Thinking*, Oxford University Press.

Robertson, S. (2017) "Anti-Theory: Anscombe, Foot and Williams," in Golob, S. & Timmermann, J. eds., *The Cambridge History of Moral Philosophy*, Cambridge University Press: 678-691.

Seanor, D. & Fotion, N. (1988) eds., *Hare and Critics: Essays on Moral Thinking*, Oxford University Press.

Williams, B. (1985/2011) *Ethics and the Limits of Philosophy*, Routledge.